

時雨の姿

泉鏡花作

一

「着たる鎧は黒革の、緘しに緘せる大鎧、草摺ながに着なしつゝ、もとより好む大長刀、眞中取つて打擔ぎ」

着たのは如何にも黒革で、草摺は長くない。小倉に鍵裂すみだらけの袴を穿き、眞中取つて打擔いだのは、もとより好む竹の小笠、被ると、身體のかくれるほどなを、學校がよひが競つて被つた。表に町處を馬印の如く大きく認め、裏へまはして、月日吉日改之、と書いてある。案ずるに此は、求之か、購ふでなければなるまいが、冨に吹上げたり、小川のめだかを掬つたり、礫打の楯にはする、ぐる／＼駈出さして置いて、手錬なもので、後から追つたり、屢々壞して幾度も買ふから、其處で、吉日改之。

それも五月雨の頃で、夕立に逢ひ、秋の雨、木葉落葉、もみぢの頃は、色づいて既に中古に成つた。

雪深き北國筋では俗に大笠と云ふのを、其の真中取つて――紐で咽喉へ結び、肩に掛けたは、寒い雨の夕あがり。眞黒な雲のたゞずまひ、幽にも月にしようか、もう一時しぐれようか、今夜あたりは時節柄、霽も可からうと山際に迷つて居る。寒さは寒し、暮れかゝる。腹は空く。いつも成らば、背負つた笠をおもしろづくに振廻し、翻翻として通るのであるが、小さく成つて窘んで行く。笠じるしが、畑雪次郎、で、色白な七八歳なる男の兒。

母さんが長煩ひで、秋の末から、どつと床についた切なので、誰に喉掛けられたやら、お伽話にありさうな孝行の眞似をして、檀那寺が日蓮宗で、傍本堂に祭つてある嬰兒のうちからお馴染の、可懐しい、伯母さんの帝母御前、鬼子母神へ願掛けに日參する、道の順で、學校からすぐに廻る

丁ど其の歸途なのである。

それにしても些と時刻がおくれた。――何處の里にも、恚うした偽善者に對する、痛快なのがあるもので、「遣つてやがら。――」など、

其の寺へ詣る道筋は同級生の旋毛曲が、眞直に通し  
てくれぬ。

先へ急げば通せん坊、あとへ下れば送狼。雖然い  
づれも、早く歸つて日課の御褒美、親々のおやつツ  
にありつきたいから、迎撃つにも待伏せるにも、  
然う長くは根が續かぬ。で、湯呑所、運動場の隅な  
どに一人隠れて、鋒尖を避けて、それから漸と御寺  
へ詣る。

それでも、不斷は參詣を濟して、寺の門を出てか  
ら、取着の角家の此羅屋の軒下へ入つて、牡丹に唐  
獅子、鯉の瀧のぼりを彩色する、青い、赤い繪の具  
を覗いたり、三軒目の古道具屋の店に、いつもお馴  
染のお土産人形、鉞かついだ金太郎と目を向合つた  
りする道草の餘裕はあつたが、師走に入つて日は短  
し、分けて、朝から降續けたので、平日のやうにし  
て學校を出た頃は、もう右の大笠の中の足許は暗か  
つた。

途中蓮池の田畝を越す、と水の空なる近山に毎日

眺むる一本松の姿も見えず、風吹き添ひし横繁吹に、  
笠を山の方へ引傾けて、袴の股立を取つて、空脛に  
雫を流した。四五町の間だけれども、場末の町の裏  
傳ひで、大々とした、古邸の空屋に成つて荒果てた  
崩土堀と、一方が其蓮池で、外は畑と、麓を見通し  
の田畝であるから、近路する此の方角の學校もどりが  
蛙のやうにばら／＼と飛んだあとは、秋は眞日中  
にも蟲の聲、分けて時雨の夕である。

但し此處を抜けて、紺屋の物干場を横に突切ると、  
屋敷町に、商家をまばらに交ぜた、寂しいが一町あ  
つて、其處に沼のやうな窪地の寺があつた。

近いから、行きには屹と其處を抜けるが、歸りは  
町續きを、大川の橋を渡つて、そして、彼の家へ歸  
るの あつたのに。

「お菜は何だらう、  
大根のお汁、鍋から湯氣

鮎と水菜  
――

門前をも憚からず

此羅屋で秋刀魚を焼

く匂にほひが芬々ぶんくと鼻はなを打うつ、おまけに、鯉こひも瀧たきもない、  
店みせは眞暗まつくらで中仕切なかじきりの格子越かっしこしに、燈ひがちら／＼と見え  
たので、心急ぎいそいそに突切つゝきつて、其その近路ちかみちへ掛かつたので  
ある。

兵糧ひやうりやうがわきの陣笠ぢんがさが、何事なにごとぞ、聞き覺ゝおほえの橋辨慶はしべんけい

着きたる鎧よろひは黒革くろかの、緘せじしに緘せじせる大鎧おほよろひ

「鬼子母神様、雪がお願いに参りました。何うぞ、母さんの病氣の治りますやうに。」

金紙銀紙千代紙の折鶴、千羽鶴。緋鹿子や淺黄匹太の腰巾着。くゝり猿、一疋猿押繪、刺繡の繪馬、額なんど、枝垂櫻に返り咲の美しさも、屋根の時雨に御堂の暗さ。谷の中に降埋めた残の錦葉の風情して、尊さ可懐さは日頃に増した、小菊の花の香幽にして、奥深く天井の高い處に、常燈明の唯一つ點されたのも、峰遙なる思あり。

「左様なら、また明日。」  
と、ぶつきら棒に三つばかり續状に叩頭をする。

これまでは、一心不亂なので、仙人の仰せつけで、藥草を背負つたやうな一日の重荷を下して物と息。學校用具の風呂敷包をがたりと言はせて、額附いた腰を上げて、さて退出る。高い壇を見通しの門へ續く敷石の、割目缺目に夜が来て、山路の暮るゝ心地がする。

板間ケ原とも言つべき御本堂前の薄暗い、透すと  
茫と見える板敷を隔てた庫裏の障子が、風で煽つた  
やうにガタリと開いて、ばたり／＼と、靜に響く草  
履の音は、當御寺のお上人、耳の長い老和尚。

此の傍本堂の境を仕劃る半蔀と黒格子の上へ、眉  
の房々と白い、柔和な顔を出して、

「兄、此の雨の寒いに、今日も、よう見えたな。」  
と言ふ。家の佛の忌日。命日。近い頃はお命講に  
も、いつも茶を給仕する、分けて、母親の病床に御  
加持を頼む聖なれば、お馴染の雪次郎。

「お上人様、今日は。」

「御病人は何な様子ぢや。」

「些ともいゝめが見えんですつて。」

上人は眉を伏せて、

「若い方ぢやに勞症は困るでなう、あの、兄、い  
ま一度、護符を進ぜようと思つての。紅猪口に、提  
婆品を寫して居る。追つけ成就の上は直ぐに進ぜよ  
うと、兄、父御に然う言づけを頼むぞ。」

「はい。」

「今な、兄に進ぜるものがある、一寸待たつしやれ。」

籬に撓に咲重つたやうな、手向の小菊の格子添ひに、霧が通ふ上人の姿。

「だぶ、だぶ。」と、經の聲。高く鬼子母神の御明の前に、眉のあたりがほの見えたが、やがて、此方へ引返して、

「此は御供物の柿ぢや、兄に鬼子母神様が御褒美ぞ。」

申された嬉しさに、黒格子の開く間を待たず、手を掛けると體操飛びに、ひらりと躍つて、本堂の板敷へひよいと入つた。腕白、こんな事は樂なもの。

「頂戴。」

お上人も可愛い兒なれば、猿ぢや、ともものたまは

ず、髯ひげの無いな口くちを白しろく開あいて、

「あは、天晴あつぱれぢや、牛若殿うしわかどの。」

いや、此これがそも嬉うれしさに、腹はらは空すいても九郎判官りゅうはん  
——もとより好このむ大長刀おほなぎなた、真中取まんなかとつて打うちかつぎ  
——と、いたいけに口くちずさみつゝ——恚かく  
蓮田はすだの路みちへ來きた。

先刻さつきの風かぜに、雨あめは一止ひとやみして、其そのかはりに寒さむさ  
が増まし、ごろた道みち、石いしも俄にわかに凍いてさうな寒さむさに成なつ  
た。ものゝ動うごくとも無なきをさら／＼と田たの水みづの枯蓮かれはす  
の莖くきに浪立なみたつて、包つくんだ霧きりに嵩増かさまして眇べうと成なるまで  
廣ひろいのは、雨あめに増水ましみづの溝みぞに落おつる響ひびきである。

春日山かすがやまと云いふあの近山ちかやまが、其その霧きりの上うへに、天てんの黒くろ  
雲くもの下したに、一本松ほんまつを檣ぼしらの影かげにして、大なる船ふねの舳へさきを  
顯あいひいはす。  
日ひの晴はれた時ときは、松まつの翠みどりが透すき通とほ

つて、赤土あかつちに赫あかく蟠わたかまる根ねに、稻掛いねかけた、帆網ほつなも見みえ、  
棚田たなだの藁家わらやの夕煙ゆふけむり。霞かすみと見みしも昨日きのふかな。

通とほりすがつた娘むすめがある。

「やあ、牛若が女に化けた。」

と今度は雪が武藏坊。十一か二ぐらゐの、目のば  
つちりした女の子、被衣目深どころでない、襟も破  
れた繼ぎはぎの半纏、柄も縞目も、よく分らぬ。袖  
だけ長いのに、紐ばかり幽に赤い處の残つた友染の  
前垂の下に、――酒買ひに行くらしい――  
ふらすこの壘を包んで持つ。肩も痩せて窶々しいが、  
色の胡粉のやうに白い、髪の房りしたことは、ばさ  
／＼に成つたが桃割の結餘つて假髪かづらの如く艶つややかな  
で、年より大きく見えるやうな、足駄あしたもなしが、塗下  
駄たの兀はげちよろけたのを、素足の紅鼻緒べにはなを、きれ／＼  
／＼なのが血ちが出たやう。石ころ道を痛いたさうに小刻こきせきに  
急いそいで近ちかづく。

實際じつさい、遠とほくに同級生どうきふせいの姿すがたを避さけて、御寺みでらに詣まうで、  
歸かへるまで、此このあたりで逢あつたのは唯此たゞこのの娘むすめばかり  
であつた。

――すれ違ちがひさまに丁ちやうと蹴ける――

目にも見せてくれむず、と腕白が、其の通すが  
りに力身をくれて、高足を踏んだ奮發に、

「あつ。」

突のめらうとして漸つと留つた。が、足駄の前鼻  
緒がうぶつりと斷れた。

「あ、」と同じ時、同じやうに聲を合せた。

行違つて、ふと立留つて、雪を熟と見送つ

た娘が、かたノ、と駈寄つて、

「危いわ、若旦那。」

唯、顔を見た。

「若旦那ぢやないや、職人の子だい。」と、一

つ突掛つたやうに言つたはいい、が、大な目に涙一  
杯。

娘が颯と臉を染めて、

「あの坊ちゃん、まあ、何うなさいましたの。」

「坊ちゃんぢやない。」

「御免なさい、何と言へば可いの。」

「雪てんです、私は。」  
と言ひながら、何故かしく／＼泣くのである。

憂慮しさうに顔を覗いて、

「あら、何うなすつて、雪ちゃん、まあ、足駄の鼻緒の切れたくらゐで、お強いんじゃないの、雪ちゃん、私がたてゝ上げますわ。」

「可いの鼻緒切れ  
切れたつて、私、跣足だつて返れるんだけど、だけれど母さん、ひどく、あんばいが悪くつて寝て居るのに、こんな事があると、不可いつて、不可いんだつて言ふんだから。」

芝居なんぞで覺えたか、忌むべき兆と思つたらしい。

見交す顔に心が傳つて、娘の睫毛にも、衝と葉末のやうに露が上つた

「たてれば直るんですわ。」

鼻緒も直れば、然うすれば、あの、御病  
雪ちゃん、

氣も治ります。私、小児ですから、じやうずには出  
來ませんけれど、ね、治す方が可いわ。」

「はい、何うぞ、――治して。お

願ひだ。姉さん。」

と急に泣止むのも、あどけなければ、叩頭をした  
も可憐しい。

娘も其の心を知つたらしく、睫毛を伏せて、うつ  
むきながら、優しく、寂しく、しをらしく、襟さき  
を視め、袂を見た。よきもの得つと心着く、嬉しさ  
の聲晴れやかに、

「さ、私の肩につかまつて、」

前掛を解いて紐を斷つて、齒に啣へ、あとを絞つ  
て細帯へ 屈めた膝は小さいが、この手拭  
を疊んだやうな、姉さんぶりの媚かしさ。

「あら、こんな事をして。」

前壺を見ると、弱つた顔色。鶏が鳴かねば通すま

い、大石小石が路を塞いだ關所に八夕と行當る

山桐の古足駄は、はじめて切れた鼻緒でない。

前に手細工の石が犇と詰った。

嫁菜の花を一束の、色は褪せたが、花簪、角の脚

は汚れたが、石に取直す指の白さ、拾ろたか買うた

か美しい。

四

「雪ちゃん。」

娘の其の肩に手を置いて、ちん／＼もが／＼と足を

をやり／＼。

「何！」

「私、矢張り若旦那と言ひますわ。」

「馬鹿言つてら。」

「あら、もつと／＼、

若旦那

那樣ですわ。私、大事な方なんですもの、」

「何故、何故さあ。」

「あの、覺えていらつしやらない事。」

カチン／＼で、漸と透した前壺の穴にさした簪の脚を、前垂に擦つた時、下から、熟と優しい顔で仰いで見て、

「私ねえ、極りが悪いわ、毎晩若旦那の内の前を通るのよ。私 餡と、かん／＼糖を賣つて

歩きます、と乞食見たいなものなの

よ。」

と瞳を濃かに、俯目に成つた　　ー

「あ、」  
打仰いで今顔を見る其のぱつちりした、大な瞳を忘れない、が、坊主合羽と稱へる、三角頭巾の桐油紙を、頭からすつぽりと、裂けもし破れもしたけれど、やがて裾まで包んで居たら、桃割も、

簪も細く赤い半襟も何も見えなかつた、とは云へ、名のられて忘れるやうな、そんな其の娘の目は、たゞありなものではない。

暗夜を透過る、大な美しい瞳であつた。

つい、五日ばかり前の事、時雨が氷るやうに小止みなく降る夜の事であつた。

上町の、心持空が高いやうな遠くから、雨のざあ／＼と寄来る中を、月夜の霜に冴えた聲。

「棒飴、かん／＼糖ー」

打切り飴の細長いのと、大豆を黒砂糖に煉かため

たのを、冬が来ると賣つて通る 都の霜の  
鍋焼餛飩は、なつかしく寂しいが、此の國のかん/  
糖は、もの憐に可愍しい。中にも其は、まだいと  
けない女の聲。

「棒飴、かん／＼糖ー」

三晩、五晩、山から里へ下りるやうに、同じ聲を  
遠くから。やがて家の前を、冷い聲音がして通つて、  
町を曲つて聞えなく成るまで、家續きの何處に一軒、  
呼込んで買ひはせぬ

また廻りの都合か、其の町へ来るのは、いつも初  
夜過ぎであつたゞけ、尚ほ聞く耳にいぢらしかつた。

雪の家は、うら若い母の看護と、父親をはじめ職  
人の、節季仕事に夜を更かす。

「雪次、雪次。」

木地を輓く職人の轆轤を廻すにつけて、くる／＼  
薄紙を巻いて散る鉋屑をふつと吹くと、鳥の羽かと

ばかり軽く天井に舞ふを面白がつて、丸い白やかな  
頬邊を膨らまして居た雪次は、十日にも二十日にも、  
こんな清らかな、大病の母の聲を聞いた事がない。

職人が二人、手を留めて、二階を仰いだから――  
やゝ耳のうとかつた父親が、聞いたら嘸ぞ、と思  
はるゝ。

「はい。」  
と、雲を踏む心地で勇んで階子段を駈上る、と炬  
燵に細りと成つて、掛蒲團の襟深々と友染を掛けた  
のが、幽な白魚の指尖に、襟の重みを搔やつて、  
「いゝ聲の女の子が来た 飴を買つてお  
上げ。商人だと思ひ。丁寧にものを言ふのだよ  
―― 職人衆にも分けて、 姑さん。」

「あい／＼、」と、ほく／＼頷く。枕許に居かゞ  
まつて看護の鐵瓶の湯氣を守る、祖母の顔と、雪の  
とを熟と視て、ほろりとして引被ぐと、髪かみの亂みだれに、  
眉まゆばかり。

「餡は薬ぢや、母さんもまゐれ。」と言ひつゝ、  
巾着の紐を解く。

ちやらりと持つて駈下りる、と仕事場を横に見た。

「棒飴、かん／＼糖。」――

「餡を買ふんだよ。」

職人が二人して、

「や、雪ちゃんの嫁さん。」

「孝行娘　――おめでたう。」

何處の娘とも誰とも知らず、境遇と年紀で、職人は品さだめ、色が白からうの、髪が佳からうの、それより、孝行娘と言囃した。

雪は一つ、身を巴にぐるりと廻つて、

「知るもんか。」

「あの翌る晩もね、私は、矢張り来るだらうと思つて居たら、遠くで聲はするけれど、私わたいン許とこの傍わきへ来ると黙だまつて通とほつて了しまふんだもの。私わたいはね、母おつかさんが、（商人あきんどだから丁寧ていねいにおし。）然さう云いつたのに、あの、懐中ふところに入れて居た勝栗かちくりを。」

娘むすめは急きふに又また仰あふいで、

「え、頂いたゞいたわ

私あたしあんな嬉うれしかつた

ことはありませんよ。」

「嘘うそ、怒おこつたんだらう

お菰こもぢやなし、

ものをくれたつて。でなけりや、故わざとかん／＼糖呼たつよばないで通とほるつて事ことはない。」

「否いへえ、聲こゑがで出でませんの、お家うちへ入ひつてお禮れいも言いへません、あのね、若旦那わかだんな。」

「可厭いやだ、をかしいや。」

「ねえ、あの、雪ゆきちゃんのお家うちの前まへではね、黙だまつ

て、密と口の中でね、お禮を言つて通つたんですわ。」

「何だい、嘘、紙に包んだ勝栗なんか、」

「違ふわ、勝栗なんかつてお言ひなさいませう。ど、どんなに嬉しかつたでせう。」

「私、私、久しく、久しくね、あんなおいしいもの頂いた事ありません。それだしね 大事にして持つて

歸つて、お爺さんに上げたのよ。――雪ちゃん は、そんな私なんかにまで優しくしておくなさる

母さんが御病氣で、眞個に困るわね。私だつて困る のよ。雪ちゃんのおつかさんは胸のお煩ひだと言ふ

のね。――私のお爺さんは頭が悪いですつて。時々刀なんか抜いて、そりや可恐い事があつてよ。

まあね、天井でも障子でも睨んでばかり居るの。もとはね、お侍様なんですつて。口惜い、残念だと言

つてはね、怒るばかりよ。私、情ない、大事なお爺さんが、それですもの。雪ちゃんが可羨いわ。それ

に私には、父さんも母さんも居ないんですもの。一人のお爺さんが然うでせう

でもね、あの頂いたのを持って帰って上げたならばね。まあ、嬉しい。去年も今年も見た事のない笑顔をして、（武士に勝栗は嬉しいの。）あの、然う言つてね、古い脚の壊れた、お三寶の上に載せて、ちゃんと膝に手をおいて、おじぎして、私にも、それから、私の正ちゃん、えゝ弟よ 分けて下すつてね。自分もぼつり／＼、きちんと坐つて食べて、それから此方はね、機嫌がよくつて時々笑ひますわ。

雪ちゃん。眞個に嬉しいんですよ、私。

雪ちゃんは、鬼子母神様へお参りの歸りですつて

私はね、妙見様へ日参するのよ。

でね、私も雪ちゃんの母さんの、御病氣のよくおんななさるやうにお願いしたいけれど、妙見様ではいけないか知ら。それに、お爺さんの願掛けと兩方ぢや、あの、二心とかで悪いか知ら。

困るわね 私 あゝ、いゝ事があ  
る。

と、ハツと心着いて、うつかり、足駄を落して、

取りなほ  
取直して、

「今夜から、又飴を賣つて、雪ちやんの前を通る時、矢張り黙てよ。そして其の時、毎晩一生懸命に、母さんの御病氣のおなほりなさいますやうに。」

あつ。」

と、思はず女氣のひれ伏すばかり、言葉さへ途絶え状に、蓮の途絶へ、百千の彈丸の弾くが如き、凄まじい音を立て、一陣の霰が襲打つた。

もの驚きの心鎮めて、漸と霰と氣がつくと、蔽ひかゝる雲に眞暗に成りつゝ、枯草に置いた手許の酒の罎にさへ、刎上り、とばしる霰が白いのに、娘の身には、桃割の鹿子一ツに響くのがない。

ばらりと前髪、驚いたあとの、尚ほ美しい瞳を瞻ると、大笠を両手に握つて、彼は露出しに頭から玉霰を浴びながら、半纏の裾も餘さず我が黒髪を蔽へる雪。

「あら、」と伸上るやうに、笠を除けると、はたと落ちて、霰のはずむ勢に、くる／＼と石に舞つ

た。其の雪の手を取ると、觸つたばかりに持った笠を落すも道理よ、冷固つて氷のやう。玉も當たらば裂けつべし。

「罰が當るわ、若旦那。」

と、内懐に確乎と取る。

雪次郎は齒をくひしばつて、堪へながら、

「冷たくないよ、男だから。」 わな／＼聲。

「男だつて、——冷たい。まあ、こんなに。」

やつと、せい／＼呼吸をして、

「母さんの、母さんの懐中へは、いつかつから、

最う手が入れられないんだもの、私は

「嬰兒だわね。」

「姉さん、姉さん甘やかしてくれないか。」

「まあ、可愛い。」

霰に射すくめられて、鴛鴦の如く搔窺んだ。二人の上へ、颯と空を遮つて、紺蛇目傘を翳蔽うた美しい婦がある。唯思ふと、ほんのり梅が咲くやうに薫

つて春めく、霰も解けて小雨の雫、紅絹の糠袋が、  
あかるいやうな、濡手拭を持添へた、湯上りの薄化粧。

今、黒雲の封じを裂いて、ぐわら／＼と鳴るほど  
霰の來たのに、此の婦は、傘目深に、袖も肩も窄め  
たが、裳はすなりとしなやかな襦袢き。――紅入  
友染の蹴出襦、すら／＼と蓮田の向う、丁ど其の紺  
屋の堀の添った池の縁を、水づたひに路へ出る、と  
其處から裳の小刻みが、やゝ急足に成つて來たので  
あつた。

「堪らねえ、堪らねえ、私あ聞いて泣いて居た。」

恚う言つて、鼻をつまらせながら、空邸の裏土堀、  
枯れたいちじくの屋根を越した下に、恰も壁の破目  
の如き形に踞つた、縞の衣ものに、羽織も被ず、白  
地の手拭で頬被した男が、番傘を引窄めたなりで、

――此の婦を見ると――ふらりと出た。

「あゝ。」  
婦は傘を傾けると、暗夜にも浮いた、ほんのりと下ぶくれのうつとりした、ぬれ／＼と艶やかな、うら若い圓鬢の顔。男に見せて、濃い睫毛で目迎へつゝ、

「居たの。」

「あたのぢやない、泣いてるんだよ、――此の二人にね――」

「見たゞけでも泣くわねえ。」

と優しく、早や其の聲を曇らせながら、

「まあ、鼻緒を。――いくら姉さんだつて、そんな手で、まあ、」

婦が傘を横に寝かすと、かはりに上からさしかけた、空脛の、尻端折の、すつきりとした男である。

「貴方が、見て在らしつて。」

一寸、す

げてお遣んなされば可いのに。」

「まさか私だつて、其の氣が着かなんだぢやない

んだけれどね。ね、こんな身體だらう、ね。」  
と頬被りの其の結めが、透つた鼻筋の下に揺いで、

「でも構はないやうなもんだけれど、私は初手から知つてるが、此の男の兒が何なんだ。鼻緒の切れたのは跣足で濟むが、大病の母さんの何かの前兆になりやしないかと言ふのを、此方の娘が、縁起直しに結ばうと言ふ意氣なんだらう、ね、—— こんな、身體だらう。ね、まあ、お聞きなさい。」

「お待ち、二人が足駄を脱いで、それを二人に穿かせて歸さう。」

さすが男の分別で、――婦が代つて緒をたてようとすると、留めると、婦は忽ち前壺を持つた懐紙を、翻然と投げて、思切りよく、褌を上げた足袋を、蹴足。

呆れる、娘と雪次郎に、

「さ、鬼子母神様、妙見様に、坊ちゃんたち、お二人が心願をお掛けのやうに、私たちも願ひがあります。此を穿いて下さると。其の念が届くんですから、後生、功德に成ると思つてね。」

(二人の話を男から聞いて、) 尚ほ半ば涙聲。

「次手に傘を持って歸さう。」と男が言った。

「お待ちなさいよ。」

婦が鼈甲の櫛を抜いて、娘の懐に入れて、さて、

其の襟をば掻合せた。

男も跣足で、此を視て、

「姉さんは、大事にお持ち。女はそれは何よりだ。坊ちゃんも男だ。出世前のお身体だ。私は何も差上げるものはない。笠で霰をおかばひなすつた、其の心を忘れないで居てください。路が寂しい。――酒屋は辻だ。――小さい姉さん、それ、小橋際まで送つてあげねえ。――相合傘で願ひだ。」

大人の足駄で、立處に背たけも伸びた時雨の相傘、恥かしさうに、嬉しさうに、七八つと、十一二が對文に行く姿。

「あゝ 私たちが蘇生る。――」

「ねえ、よく、似合ふわね。」  
と背後から、濡れつゝ眞白な手を合す。

「えゝ、鶴龜、をがんぢや不可いよ。」

「否、行末を祈つて上げるの。」

をさなき二人に幸あれかし。

「慾には二人の死ぬ生命で、母さんとお爺さんの、病氣と云ふのを治して上げたい。」

彼方が見返る、と身を背けて、雪がおいた大笠の、  
両端に、二人が齊しく手を掛けた。

霰のなごりの一時雨、男女の袖は濡れながら、  
春日山の頂は、一本松の薄月夜。

かた明りに顔を合せ、目をふせて笠を見た。

「畑雪次郎。」

「や、不思議な縁だ。」

「まあ、二人の名を一所に

と莞爾

と笑む。

婦の、鬚にさしかざして、

「お雪さん。」

「次郎八さん。」

其の名も對に小唄に残つた、紺屋の紺に氣の染まぬ、お雪は、無理にひかされた新地の藝子。次郎八は、型附職人職人。豫て心中の手筈して、こゝで待ち合せた、蓮池の、抜道は、二人が未來の心の棧。――！ 湯歸りも、さて仇ならず、死に行く身を清めたのである。

「さあ、約束の一本松へ。」

見上ぐる顔も小雨の中に、月を迎へて晴々しく、  
「二人の思であの松を、女夫松にして見せようねえ。」

と、たよ／＼と凭れかゝる、婦を笠で確乎と抱く  
尾花枯立つ刈田の畔、畦づたひに姿をひそめて、一本松へぞ辿り行く。

あとに大川の瀬が響いた。  
二人は橋へ着いたであらう。

【完】